テクノロジーと法の未来へ

Vol.32

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で
分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。

中央大学公式Webサイト／学部情報／国際情報学部
chuo-u.ac.jp/academics/faculties/itl/

iTLでの学びと社会の課題へのアプローチ

国際情報研究科修士課程2年
私立茨城高等学校（茨城県）出身
長谷川（はせがわ） 桂司（けいじ）

私は大学入学以前から、インターネットを利用する中で怖い思いをする人がいることや、インターネットという便利なツールを悪用する人がいることを社会の課題と考えていました。そこで、大学では「安心安全なインターネット環境を実現するにはどうすればよいか」を追究していきたいと思いました。

大学を選択する中で、情報学と法律学の双方の側面から課題にアプローチでき、〝学際的〟な学びができる国際情報学部（iTL）はとても魅力的であったことから、入学を決意しました。入学当時はコロナ禍真っ只中であり、オンライン環境を含め、社会全体に新たな課題が蔓延していました。そんな中、SNS上における誹謗中傷問題や偽・誤情報（いわゆるフェイクニュース）の問題は特に課題であると感じ、日々調査を進めていました。

日々の授業では、現役の行政官の先生方と討論を交わし、学生オリジナルの政策を立案する「情報政策ワークショップ」や、社会で公共政策に携わる先生方の話を聞くことができる「ICTビジネスと公共政策」といった貴重な授業を受講する機会が多くあり、社会の諸問題に対して多種多様なアプローチ方法があると学びました。実務家の先生方の講義を受講できたことは、社会人になった今振り返ってみても、本当に貴重な経験だったと感じています。その一方で、授業を受講していく中で視野も広がっていき、これらの問題に対し〝刑事法〟からのアプローチもあることを学び、刑事法分野をゼミでの研究の中心に据えることにしました。その中でも、特に「サイバー犯罪の捜査」に関する議論は興味深く、大学4年間にわたり研究に没頭することができました。

国際情報研究科では社会人の方も多く、
懇親会で名刺交換、といった場面も

就職活動の際は、自身がiTLに入学した際の問題意識を思い返すことで、自分が何をしたいのか、世の中をどうしていきたいのかを原点に立ち返って考えたことが大きな指針となりました。「安心安全なインターネット環境を実現するにはどうすればよいか」ということを軸に据え、さまざまな企業を検討しました。しかし、結果として公務員を選んだ決め手となったのは「誰一人取り残さない」というキーワードです。安心安全なインターネットは、全員が安心してインターネットを利用できることが不可欠であり、国民にあま

インターネットに関する公共政策を議論する
国連の会議に参加

4年間の学びが実を結んだと実感した
大学・学部卒業式

ねく安全な環境を提供するためには、公の立場からのアプローチが必要不可欠であると考えました。この思いを官庁訪問で伝えたところ、総務省とご縁ができることとなりました。

しかしながら、就職活動を行う中で葛藤もありました。大学3年間の学びを振り返り、まだ自身の持つ課題に対して十分な検討ができていないという思いが強くありました。このことから、大学では就職活動と並行し「大学院科目履修制度」を利用し、国際情報研究科（大学院）の授業に参加することにしました。国際情報研究科は、社会人が多く在籍する大学院で、授業を受ける中で、働きながら研究を続ける社会人の方々のお話を聞くことでとても刺激を受けました。また、制度の詳細を調べる中で、学部生時代に履修した大学院の授業単位が大学院入学時に認定されることを知り、とても大きなアドバンテージになると考えました。そこで、本制度を利用することで（通常よりは）負担は少なく、働きながら大学院に通うことができると判断し、このまま大学院にも進学することを決意しました。

社会人、また国家公務員となった
実感が湧いた入省時の桜

いざ大学を卒業し、新社会人として社会に踏み出す傍ら、新入生として大学院にも進学してみると、想像していたとはいえ大変な日々が続きました。仕事柄、退庁が遅くなってしまう日もあり、大学時代以上に研究に費やす時間が少なくなってしまい、当初はどうなるかと思いました。しかし、大学院では仕事では得られない知見や人脈が多く得られ、〝負担感〟よりはむしろ〝面白さ〟が勝り、無理なく授業を履修することができました。土曜日のゼミでは学部生時代に引き続き、サイバー犯罪捜査に関する研究を進めています。国際情報研究科の良いところは、学部での学びとの〝つながり〟が大きく、学部生時代の知識をフル活用して研究を進めていけることです。一方で、さまざまな業界で活躍している社会人の学生と討論を交わせることや、他分野を研究する学生とのかかわりも多く、自身の研究に没頭しつつも知見を広げられています。

今後、社会人、また役人として社会のさまざまな課題に対峙していく必要があると思います。その際は学部で身につけた〝学際的〟な視点、大学院で身につけた〝研究・追及していく姿勢〟、仕事で身につけた〝社会へのアプローチ方法〟のすべての視点をフルに活用し、少しでも自分の持つ課題、社会の課題の解決に貢献していければと考えています。